

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報 感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 http://www.higurashi.net/ 第0030号
護國青年會議 http://www.gokoku.net/ 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成18年10月25日

北朝鮮の核実験と日本の国防

「牙を剥いた北の狂人」

今日九日午前十時三十六分北朝鮮が核実験を実施した。ついに金正日は越えてはならない一線を越えたのである。これは、国際社会への挑戦と人類への背徳行為である。



今まで日本政府は、事あるたびに「断固たる措置」とか「毅然とした態度で」と言ってきたが、今年の夏まで政府が断固たる措置をとったことや毅然とした態度で相手国に對峙したのを見たことも聞いたことも無かった。しかし、北朝鮮による七月のミサイル発射の時は、満足のいくものではなかったが曲り形にも毅然とした態度で臨み、それなり

の成果を挙げて見せた。国際間の交渉において、相手国に對して自国の論理を百パーセント押し付けようとすれば交渉は決裂し、両国の出方次第では武力衝突となる。だが時には戦争も辞さない覚悟で対峙しなければならぬ場合もある。今回の北朝鮮による核実験が、まさしくそれである。

六十年前、日本国民は米国によつて原爆の恐ろしさ、悲惨さを嫌という程味わされた経験を持つ世界唯一の被爆国である。よりよつて人類唯一の被爆国の目と鼻の先で狂人が火遊びを始めたのである。

人類が核という禁断の武器を手に入れてから最も危険な事態が日本の庭先で起きていくということをお我々は、真剣に自覚しなければならぬ。今日本は国家存亡の危機にあると言つても過言ではない。このまま手を拱いているならば最悪のシナリオが我が民族を包圍し、気がつけば逃れる術は失われているだろう。

北朝鮮が暴挙に出るから一週間も経たない日本時間の十五日未明、国連安保理が制裁決議案を全会一致で採択した。この種の決議では異例の速さだった。決議は、国連憲章第七章四十一條に基づくもので戦車など指定された大型通常兵器、核・ミサイル・大量破壊兵器関連物資、ぜいたく品の禁輸、大量破壊兵器への関与が認定された個人や団体の海外の金融資産凍結、同計画への関与が認定された個人の海外渡航禁止に向けた必要措置などを加盟国に義務付けている。さらに大量破壊兵器の移転を阻止するため加盟国の国内法や国際法を踏まえながら、必要があれば北朝鮮を出入りする船舶などの「貨物検査(臨検)を含む協調行動」を求めている。

安理の決議は、北朝鮮への武力行使を懸念する支那とロシアに譲歩し、制裁を経済外交分野に留め、臨検についても「臨検を含む協調」と表現を弱めて妥協を図つたものである。支那は「海上での臨検が武力紛争に発展する」として、これを外すよう要求した。当初日米が主張した「各国の義務」は「各国の自主判断に委ねる」こととなつてしまった。では何故に支那やロシアは、国際社会に挑戦状を叩きつけた北朝鮮をこれほどまでに擁護するのだろうか？

かつて支那共産党と北朝鮮労働党は、血盟関係と言つても良い固い絆で結ばれていたが、現在は非常に冷めたものとなつている。ロシアとて同様である。

支那とロシアの思惑という観点から検証すると、両国に共通の北朝鮮利用方法が見えてくる。それは「対米・対日カード」に金正日の独裁恐怖政権を利用するという狡猾な外交戦略である。つまり支那の思惑は、拉致・偽札・偽タバコ・麻薬、ありとあらゆる犯罪を生業とする「ならず者国家」が日米に激しく反発す

かつて支那共産党と北朝鮮労働党は、血盟関係と言つても良い固い絆で結ばれていたが、現在は非常に冷めたものとなつている。ロシアとて同様である。

支那の憂鬱と思惑
両国にとつて北朝鮮の存在は足手纏いでしかなく、できれば関わりたくないのが本音だろう。しかし、両国とつて無視できない深刻な問題がある。支那とロシアには現在、数百万人の朝鮮人が住んでいる。金正日独裁体制が崩壊し南北朝鮮統一の気運が高まれば、支那に在住する朝鮮人を巻き込んだ統一朝鮮建国への民族運動へと発展する可能性がある。これまで民族運動や民族紛争に手を焼いてきた両国にとつて朝鮮人の民族運動が、他の諸民族に与える影響は悩みの種であり、胡錦濤とプーチンは、憂鬱な日々を送ることとなる。

支那とロシアの思惑という観点から検証すると、両国に共通の北朝鮮利用方法が見えてくる。それは「対米・対日カード」に金正日の独裁恐怖政権を利用するという狡猾な外交戦略である。つまり支那の思惑は、拉致・偽札・偽タバコ・麻薬、ありとあらゆる犯罪を生業とする「ならず者国家」が日米に激しく反発す

国連憲章・第七章
平和に対する脅威、平和の破壊及び侵略に関する行動
第41条(非軍事的措置)
安全保障理事会は、その決定を履行するために、兵力を使用せず、かつ同盟国に要請することができる。

ればするほど、逆に自国に対しては従順であればあるほど日米に対する戦略的価値が高まり、少々のアメを与えて北朝鮮を隠れ蓑にしようとしているのである。

このように見てくると北朝鮮という国は、支那やロシアにとつて厄介者であることは間違いないが、日米を念頭においた場合、戦略的価値があり、このままの状態が暫く続いて欲しい、というのが両国の本心であろう。

日本独自の制裁決定

安保理の制裁決議に先立ち日本政府が驚異的な速さで制裁を決定した。北朝鮮が核実験の実施を表明した二日後のこと、これまでの政府の対応からは考えられない迅速さだ。日本独自制裁の柱は、全ての北朝鮮籍船舶の入港禁止 北朝鮮からの全ての品目の輸入禁止 北朝鮮国籍を有する者の入国は原則禁止の三点であるが、今後の北朝鮮の対応や国際社会の動向などを考慮しつつ、さらなる制裁を検討している。

北朝鮮の核武装により、最も深刻な脅威に晒されるのは我が国であるが、現在の法制では日本のとれる対応には限界があり、新たな法整備を急がなければならない。

北朝鮮の核実験は、東西の

冷戦構造の崩壊後に起きた湾岸戦争やイラク戦争とは異なり、直接日本に火の粉が降りかかってくる問題である。日本政府は、最悪のシナリオを想定して、北朝鮮に対峙しなければならぬ。それが国民の生命と財産を守る政治家の責務である。

核保有論議の是非

アメリカの核の傘に守られ、太平洋の美酒に酔い続けて六十年、嘗ての「もののふの心」を携えた日本人は何処へ行ったのだろうか。

今月十五日、自民党の中川政調会長は、テレビ朝日の討論番組に出演し、日本の核保有について「憲法でも核保有は禁止されていない。核が有ることによって他国から攻められる可能性が低くなる。議論は当然あっていいことだ」と述べた。中川氏の発言は、日本が危機に直面している今、自分の国は自分で護るといふ国家防衛の基本的理念に合う真つ当な意見である。しかし、与野党から中川氏の意見に対し、一斉に批判の声が上がった。その多くは、議論することとは国際社会に疑念を与えるから議論することさえあつてはならないというものである。日本は何時から民主主義ではなくなつたのか、政治家が議論するのは、仕事の一つでは

ないのか、これは紛れもない言論弾圧である。

野党だけでなく自民党内からも総攻撃を受け、四面楚歌となつた中川昭一政調会長を唯一人擁護したのは、麻生外相であつた。外相は十八日の衆院外務委員会で、共産党議員の質問に答え「隣の国が持つことになつた時、日本が核保有の是非を検討するのモ駄目、意見交換をするのモ駄目」というのは一つの考え方とは思つが、議論することも大事なことである」と中川氏の発言に理解を示した。外相の答弁を受けて、またぞろ与野党から批判の大合唱である。日本には身を挺して国を護ろうとする政治家はいないのか、嘆かわしい現実である。

世界唯一の被爆国民である日本人の多くは、核に対して無意識に拒否反応を起こし、持つこと自体が悪いという認識を持つているが「核は悪だ」と言っているだけでは、思考が停止し、現実を見失う恐れが生じる。支那やロシアは既に核保有国であり、北朝鮮は核実験を実施した。支那にいたつては核ミサイルを日本の主要都市に照準を合わせて配備している。このように日本は六十年前と同じ様な危機に立たされている。日本を包囲する核の脅威は、着々と拡大し、核保有の論議さえ許さぬ

少年の自殺と教育現場の大罪

学校と教師の在り方を問う

などと言つていたら、逃れることさえできなくなる。それを黙つて見ている程日本民族は臆病なのか、国民が危機に直面している時、命を懸けて国家と国民を護る気概を持つ政治家はいないのだろうか。

最早、平和という名の幻想を追い求めていた時代は終焉した。今こそ六十年間の呪縛を取り除き、核保有を真摯に議論する時だ。国家防衛の基本的理念に立ち、自分の国は自分で護る時がきた。日本人の精神の回復を心から願う。

平成十八年十月二十日
編集人・戸出蒼流

今月十五日夜、福岡県筑前町の三輪中学校二年の男子生徒が、自宅倉庫で首を吊つて自ら命を絶つたという悲しいニュースが流れた。原因は年々陰湿化するいじめであつた。事の発端は男子生徒が一年の時の担任であつた学年主任の軽率な言動だつた。この教諭が、男子生徒の母親から受けた相談内容を同級生の前で暴露したことにより不名誉なあだ名をつけられ、教諭にはから



男子生徒を自殺に追い込んだ福岡・三輪中2年学年主任

田村伸一 (47)

取材部長・加藤浩司
編集部・秋山慎一郎

かわれ、同級生からは陰湿ないじめを受けるようになり、男子生徒は悩みに悩んで死を選択したのである。年端もいかなない少年を自殺に追い込んだ教諭や生徒は、歴とした殺人犯であるが、少年の母親にも責任の一端があるので、はなかるうか。健康な思春期の少年が性に興味を持つことは、普通のことである。家庭内で充分対処できた筈である。最も信頼していた家族に裏切られた少年の心中を思うと、耐えられない切なさを感じると共に臭い物に蓋をしようとする学校側には激しい憤りを覚える。

当初、いじめを認めて家族の前に額を叩いた校長は、上からの圧力があつたのだから、一転していじめはなかつたと弁解に終始し、己の保身のために聖職者の仮面を捨てて醜態を晒した。学校教育で大切なことは、人としてどうあるべきかを教えることである。教師は間違いを正し、時には殴りつけても、人間として誤つた道を歩く生徒を正しい道へ連れ戻さなければならぬ。これは教師の最低条件である。

男子生徒を傷つける心算は毛頭無いが、私は自殺を選択する人間を軽蔑する。世間には、生きたくても生きられない人もいる、六十年前には御国の為に散華した青少年がいた事を忘れてはいけない。死んで花実がなるものか！